

口語詩句 9月 龍 秀美 202409

<総評>

直接的または関連の語がなくても、戦争の気配が漂う詩句がチラホラ。時代は否応ない。

輸送機の腹開き魚卵ほどに兵

長谷川柊香 宮城県

——魚卵の生々しさの一方、人でありながら粒子である無名性が兵というもの。

水ふうせん

ぱ、しゅんと碎き

えいえんの汀の海を覗かせてやる

さいう 石川県

——「ぱ、しゅん」という音のはかなさが「えいえん」と釣りあっている。

天高し戦土臆病故強く

中矢 溫 東京都

——戦士のように寂しく突き抜けた秋の季語。

そんなんじゃない記憶たちで

できあがる泉だ

ここはやさしい泉

こはくいろう 大阪府

——記憶につきまとう後悔や哀しみ。「そんなんじゃない」というやさしい言葉で湧き出す泉がある。

神様は去っていく速さでわかる

針金みたいな三つ編みだった

汐見りら 東京都

——運命の神なのか、固く、無情に、素早く、後ろしか見えない。

娘は

「パパと一緒にうんちしたい」

デートのようなものだと思う

貴田 雄介 熊本県

——父と娘という甘やかで不可思議な関係の始まり。

矯正の器具も外して人魚姫

雲理そら 大阪府

——矯められると誰もが自分でないものになる。

受戒して

飛び込んだのは

ビオトープ

桜庭 紀子 和歌山県

——宗教とは自ら完結した閉鎖世界なのだろう。

桃熟れる

delete キーを押すたびに

檜野 美果子 宮城県

——ひとつの世界が消滅するたびに、次の世界の成熟度が妖しく増す。

オリオン座しか知らないから

オリオン座が見えると嬉しい

畔上透 東京都

——人は知っているものしか見ないという真実。

果てしない亀ですよ

牛田 悠貴 東京都

——鳴くことによって亀はあらゆる未知の可能性を体現する。

母に向かって僕と言う時、
俺の形は少しボヤける

山石なか 福岡県

——状況と関係が絡みあうと、立ち位置を分からなくするのが母という存在。

火を見ればまばたきのたび
眼のなかに
濡れながら火が像をなすこと

早瀬はづき 大阪府

——リズムと調べが美しい。やはり瞳の中の濡れた火だからか。

まったくおみなに
なれと育てられたけど
それって男のことなの？ 母さん

伊東マンション 東京都

——日本の女は男の仕事も女の役目も要求される。

未来ごと引っ張るように
ティッシュ引く

互井宇宙論 埼玉県

——ティッシュには制限も無ければ終わりも無い。可能性に満ちている。